

農政産業観光委員会 県外調査活動状況

1 日 程 令和7年9月3日（水）～5日（金）

2 出席委員（9名）

委員長 流石 恭史

副委員長 中村 正仁

委 員 水岸富美男 宮本 秀憲 久嶋 成美 伊藤 毅

清水喜美男 久保田松幸 佐野 弘仁

3 欠席委員 なし

4 調査概要（主な質疑答弁）

（1）Jヴィレッジ

（Jヴィレッジの復興・再整備について）

問）今の説明以外に、例えば、地域の商工業や地域の学生、商店街などと連携して行っているイベントはあるのか。

答）先ほどハーフマラソンが代表的なものとして説明を行ったが、そのほかには町のお祭りでJヴィレッジのブースを出している。また、インターハイが行われるときに、町のブースを出す際の連携も行っている。

学校関係では、この地域にあるふたば未来学園という高校及び中学校の学生が企業体験に来たりするところでの連携はしているが、正直まだまだというところである。

宿泊施設がメインとなっているので、県外からの利用客が多い。福島県内の方がJヴィレッジで合宿することが少なく、県外に目が行っている部分があると思う。

先ほどの動画の中でも、最後に森保監督が、「地域との連携が、これからのJヴィレッジの使命」と言っており、確かにその部分がまだ欠けているかもしれないため、地域と連携しながら、今後できることを進めていきたいと思っている。

問）動画の中で国際会議を誘致しているとのことだが、国際的な会議というのは、サッカーなどスポーツに関連したものか。

答）今年で言うと、カーカム会議という土壌保全関係の国際会議が夏に開催された。国際会議は年に1回程度、予約を受けている。

ほかには企業による研修で利用されている。

問）Jヴィレッジ駅ができたことにより、Jヴィレッジの国際的な利用者はどのくらい増えたの

か。

答) 駅を利用した海外からの来訪者の実績は少ないと思っている。

日本の企業がＪヴィレッジに宿泊して、翌日に原発まで視察に行くなどの利用のほうが多い。イベントのときに利用する方はもちろんいるが、通常は企業の方の利用がメインとなっている。

問) 東京電力がこの施設を造って、福島県に寄附したことが大きなきっかけだったと思うが、地域への貢献については、どのようなことがあるのか。

答) Ｊヴィレッジで全国大会が開催されると、多くのチームが参加することにより、応援する方も含めて多くの方たちに双葉郡に来てもらえる。それによって地域の商業がにぎわうため、交流人口の拡大の部分で地域に貢献できていると思っている。

問) サッカーは４年間のインターハイ開催の契約をしたと聞いた。野球には甲子園があるが、サッカーも野球のように、今後、大きな大会を開催することができる要素はあるのか。

答) 定着してもらえたことにより、４年契約になっているが、その先もぜひＪヴィレッジで開催してほしいと思っている。

冬の高校サッカー選手権の決勝は国立競技場で行われており、みんなが国立競技場を目指すと言われていて。夏のインターハイは持ち回りだったこともあり、どこを目指すというのはないが、先日、日曜日のお昼ぐらいのテレビ番組であるミラモンＧＯＬＤで、鹿児島城西高校の特集を行っており、選手たちが「福島に行こう」という掛け声をしていた。一、二年だとなかなか「福島」や「Ｊヴィレッジ」という言葉は出てこないが、定着してくれば、みんなが「福島を目指そう」という形になるのかなと思う。

「夏のインターハイといえばＪヴィレッジ」が定着するように、長く続けていきたいと思っている。

問) 宮城県の女川原発は、津波を想定して高台に造られたと聞いている。失礼な言い方になるが、この地も過去１００年の間に３回津波が来たと聞かれていることも耳にしている。

今後、万が一、この地域に同じような津波が来て災害になり、Ｊヴィレッジが再度震災の拠点になる可能性があると思うが、想定はされているのか。

答) Ｊヴィレッジを震災伝承施設として、震災のことを伝えている一つの目的として、震災を風化させないという部分がある。

震災を風化させないということは、忘れないということだと思っている。

震災を経験したが、地震が来たら津波が来るということは、震災が来るまでは考えたことがなかった。

今の子供たちは、地震が来たら津波が来るとか、大雨が降ったら洪水になるといったことが根づいてきている。震災の経験の一つであるため、それを忘れないように伝えていくこと

が使命だと思っている。

よく学生たちには、震災によって備えの部分を学んだので、皆さんもそのような部分を忘れないようにして、学校や家族の人とどこに避難するかを話し合うように話している。



※ J ヴィレッジでの概要説明、質疑の様子（終了後、施設内の視察を行った。）

（２）福島水素エネルギー研究フィールド（FH2R） （FH2Rにおける取組について）

問）水素と地球環境の保全について教えてほしい。

答）カーボンリサイクルとよく言われているが、それには水素が必要である。水素は安く手に入ると思われるかもしれないが、サプライチェーンの上流の部分では非常に難しく、いかに低コストで水素を供給でき、かつグリーンな水素を提供できるかがポイントになる。

余談になるが、最近では天然水素というものがある。石油天然ガスと同じように、地中に水素があり、日本でもNEDOがようやく研究を始めている。長野県の温泉の中に、水素が出ているところがある。天然水素、ナチュラルハイドロジェン、ゴールド水素など、いろいろな呼び方をされており、アメリカでもかなり研究をされている。

どのようにして水素ができるかというと、地球には地殻があり、マントルにかんらん岩という鉄やマグネシウムを多く含む岩石がある。水を注入すると、そのかんらん岩と水が反応して蛇紋岩化作用が引き起こされ、水素が発生する。

それが何らかの地質構造の中で、キャプチャーの中に水素がたまり、それが出てくると天然水素になるという話もある。

もしそうだとすると、水素は桁違いに安くなる。

問）探す技術も必要か。

答）そのような技術はかなり開発されている。アフリカやオーストラリアでは、80%ぐらいの確率で水素が出ているという報告がある。

水電解だけではなく、いろいろな水素の作り方や探し方がある状況である。



※福島水素エネルギー研究フィールドでの概要説明、質疑の様子（終了後、施設内の視察を行った。）

（３）福島ロボットテストフィールド（ＲＴＦ） （ロボットの社会実装による安全で豊かな社会の実現について）

問）ＲＴＦの利用者情報についてお尋ねしたいが、一般企業は、人口減少対策のためにロボット化するか、労働負担が大きい産業であるからロボット化するなどの理由で利用されているのか。

答）業務に携わる人が少なくなっているため、新しいロボットを開発して性能を向上させるなど、ある企業の一部門として、業務を行っている企業というイメージである。

問）山梨県は中小企業の割合が９９．９％であり、この方たちが山梨県の産業を支えているが、その中にはたくみの技を持っているところがあり、その技術の後継者がおらず、継承するためのツールとして、ロボット化や機械化というアイデアがある。

そのようなところに参入してもらい、ノウハウの展開化をしてもらえるのかをお聞きしたい。

答）ここの施設は、いろいろな実証をしている場であるが、私たち自身が研究開発を行っているのではないということと、企業の実証内容は細かく知らされておらず、内容を詳しく承知していないためお答えできない。

問）先ほど絆特区の話があったが、２０２４年の岸田政権の際に、すき家のフードをデリバリーする実証事業があったと思うが、最近もまだ行っているのか。

答）実際の配送はまだ行っておらず、今年もイームズロボティクスというロボットメーカーとすき家で配送の実証実験を行う予定である。

問) 通常の1時間の最低時給は1,000円を超えたと思うが、ドローンを使って配送すると、1時間当たりのコストはどのくらいになると見積もっているのか。

答) そこまでは分からない。データとしてあるのは、長崎県のそらいいなという会社であり、実際に離島でドローンによる配送を実施している。

問) 先ほど質問したのは、ラストワンマイル対策を行う上で、コストを知りたいと思ったからである。

あと、ドローンの配送の実証事業は、5年ぐらい前からされているが、ドローン自体の性能は向上したという認識でいいのか。以前は20分がバッテリーの限界だったと思うが、その後、ガソリンや水素で稼働するドローンが開発されている。基本的にはリチウムイオン電池であると承知しているが、どのくらい飛んでいられるのか。

答) 稼働時間が2倍になった、3倍になったということは多分ないと思う。ドローンに荷物を積むとなると、積む重さによって変わるが、通常のバッテリータイプのドローンであれば、稼働時間は30分から1時間ぐらいであるため、大きく変わっていない。ドローンのバッテリーは、パナソニックなどのメーカーが開発しており、ドローンだけではなく、車などにも波及すると思うので、そのような面で見れば性能は向上していると思う。

問) 基礎的な技術革新はまだ起こっていない認識か。

答) まだ起こっていない。一方で、水素を使用して燃料電池で飛ぶものや、通常のバイクのガソリンエンジンを改良して、2時間くらい飛ぶことができるものもある。ほかには、ロータータイプのドローンではなく、固定翼タイプだと速度が速く、距離を稼ぐことができる。



※福島ロボットテストフィールドでの概要説明、質疑の様子（終了後、施設内の視察を行った。）

（４）農業法人深作農園有限会社

（深作農法と自社農産物を活用した６次産業化について）

農業法人深作農園有限会社にて深作農法と自社農産物を活用した６次産業化についての概要説明を受けた後、質疑を行った。



※農業法人深作農園有限会社での視察の様子

以上